様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月 ２９ 日現在

機関番号：２４４０５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ０２８７４

研究課題名（和文）IRの専門性活用と大学の文脈の相互構造に関する研究

研究課題名（英文）Research on the interplay between the utilization of IR expertise and the context of universities

研究代表者
橋本　智也（Hashimoto, Tomoya）

大阪公立大学・国際基幹教育機構・准教授

研究者番号：４０８０２３２７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は大学のIR担当者の能力と大学執行部の期待の関係について、大学の設置形態（国立・公立・私立）と規模（学士課程の収容定員）による違いに着目して検証を行った。アンケート調査の結果、大学執行部はIR担当者に幅広い活動を期待しており、設置形態や規模によって期待する具体的な活動内容には差異があることが示された。また、大学執行部の期待と現状の一致度は全体的に高かったものの、設置形態や規模によって差異が見られた。公立大学と小規模大学では比較的一致度が低く、これは人員配置の問題と関連している可能性が示唆された。本研究は、各大学が自大学の状況に適したIR活動を展開する上での有益な視点を提供するものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は大学のIR担当者の能力と大学執行部の期待の関係について、大学の設置形態と規模による違いに着目して検証した。アンケート調査の結果、大学の設置形態と規模により、期待と現状の関係性に差異があることが示唆された。
学術的には、IR活動の質的向上と効果的な人員配置について新たな視点を提供した。大学経営におけるデータに基づく意思決定を支えるための重要な知見を提供することで、教育研究の改善に寄与した。
社会的には、本研究は各大学が自大学の状況に応じた最適なIR活動を展開していくための手がかりを提供する。本研究によって、より効果的な大学運営が可能となり、大学教育の質向上につながることが期待される。

研究成果の概要（英文）：This study examined the relationship between the competencies of Institutional Research (IR) personnel in universities and the expectations of executive bodies. We considered the influence of the universities' establishment type (national, public, private) and scale, measured by undergraduate student capacity. Our survey uncovered diverse expectations for IR activities, varying with the universities' type and scale. Although there was a high degree of congruence between these expectations and the existing state of affairs, notable differences emerged according to university type and size. Notably, public universities and smaller universities showed less alignment, potentially indicating staffing challenges. This research provides insights to help universities develop IR activities that best suit their needs.

研究分野：高等教育学

キーワード：IR　Institutional Research　大学執行部の期待　IR担当者の専門性　訪問調査・ヒアリング調査　大学の規模　設置形態（国立大学／公立大学／私立大学）

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

IR は日本の高等教育政策の中で重要な政策と位置づけられ、教育の内部質保証と三つのポリシーなど社会的要請が高まる一連の大学改革を推進させるものである。その体制整備として量的拡大の政策がとられ、IR 担当者・組織は急増した。教育研究や経営の改善を具体的に促すこと、つまり IR 活動の質的向上が急務となり、専門性を備えた IR 人材の育成と活用が必要となっている。

研究代表者らは過去に、日本における IR 担当者の専門性の実態について体系的な全国調査を日本で初めて行い、統計スキルの高い IR 担当者が採用されていることを明らかにしていた。一方で、同調査において、大学側の期待と IR 担当者が持つ専門性に齟齬があり、IR 担当者の専門性が十分に発揮されていない状況が示唆されていた。

IR 活動の内容はそれぞれの大学が置かれた状況に依存していることが指摘されている。具体的には、中途退学や入試募集、学修成果の可視化や教員の教育改善、認証評価や内部質保証の体制整備など、抱える課題の深刻さや関心の濃淡は大学によって異なる。また、意思決定プロセス自体や、そのプロセスにおける IR 組織の位置づけ、データ蓄積の整備状況、IR 担当者の採用方針など環境面でも大学ごとの差異は大きい。

そのような文脈の多様性に対して、統計の知識・スキルを強調した採用だけでは、大学側の期待と IR 担当者の専門性が合致しないのは当然と言える。そこで、「大学が期待する成果」、「必要となる専門性」、「IR 担当者が実際に持つ専門性」の相互構造に着目し、IR の専門性が大学の文脈に合致して活用されるための促進・阻害要因を解明することで、ミスマッチを解消することを目指した。

２．研究の目的

本研究の目的は、IR 人材と大学側の期待のミスマッチを解消するための視点を提供することであった。IR 活動が有効に機能するためには、専門性を備えた人材がいるだけでは不十分であり、その専門性がそれぞれの大学の文脈に合致する必要がある。本研究は「大学が期待する成果」、「必要となる専門性」、「IR 担当者が実際に持つ専門性」の相互構造に着目した。

３．研究の方法

まず、 国内の大学を訪問調査し、IR の専門性活用を促進・阻害する要因に関して、アンケート調査で問うべき内容を探索的に検討した。対象校は 2 年間で 12 校であり（国公私立それぞれ 4 校）、西日本方面の 6 校を研究代表者が担当し、東日本方面の 6 校を研究分担者が担当することを予定していた。調査対象者は大学側の期待を尋ねるために、教学や入試等を担当する副学長とし、半構造化面接法で聞き取りを行った（聞き取ったことの類似点・相違点をマトリックスで整理し促進要因と阻害要因を抽出した）。なお、新型コロナウイルス感染症の拡大により、当初計画していた訪問調査（対面形式）、アンケート調査は予定よりも後ろ倒しで実施した。訪問調査については、2021 年度に Web 会議システムもしくはメールによるヒアリング調査で代替した。

４．研究成果

全国の大学執行部を対象にアンケート調査を行い、IR 担当者に期待される能力や活動、大学執行部の期待に応えられているか、そしてどのように配置されているか等について調査した。回答率は 25.8%（197 校）であり、内訳は設置形態別では国立 14.2%（28 校）、公立 17.8%（35 校）、私立 68.0%（134 校）、大学規模別では大規模 9.6%（19 校）、中規模 19.8%（39 校）、小規模 70.6%（139 校）であった。調査結果の概要としては、大学の設置形態（国立、公立、私立）と大学規模（学士課程の収容定員による）によって一部違いがあり、特に公立大学と小規模大学では期待と現状の齟齬が見られた。

以下に調査の観点別の結果を示す。そして、本研究の学術的意義、社会的貢献について述べる。

（１）大学執行部は IR 担当者にどのような能力・活動を期待しているか

設置形態と大学規模を分けずに全体で見ると、IR 担当者を配置する際に期待していた活動（①設計／②収集／③分析／④報告）を尋ねた設問（複数回答可）について（回答数：176 校）、選択肢の組み合わせで最多は①～④全てに期待していたとの回答（46.0%）であり、次いで多かったのが②～④に期待していたとの回答（16.5%）であった。このことから、特定の活動ではなく、幅広い活動が期待されていたことがわかる。選択肢を個別に見ると、①設計が 54.8%、②収集が 73.6%、③分析が 83.2%、④報告が 65.5%であり、分析への期待が高い一方で設計への期待は比較的低かった。それらの選択肢の組み合わせの傾向、個別の選択肢の傾向は全ての設置形態、大学規模で同じであった。

IR 担当者を配置する際に期待していた活動内容を 10 の選択肢で尋ねた設問（「その他」は自由記述式；複数回答可）では、設置形態による違いが見られ、最多の選択肢は国立が「データベースに関すること」（64.3%）、公立と私立が「学修成果に関すること」（それぞれ 54.3%、84.3%）

であった。国立の結果は、学内の各種データベース（研究、教務、人事、財務会計）の連携の不十分さが影響している可能性がある。大学規模で見た場合には、全ての規模で「学修成果に関すること」が最多であった（それぞれ 100%、74.4%、73.9%）。

（２）IR 担当者は大学執行部の期待に応えられているか

設置形態と大学規模を分けずに全体で見ると、上記の「期待していた活動内容」について、当初の期待と現況がどの程度合致しているかを尋ねた設問では（回答数：176 校）、「とても合致している」が 22.7%、「やや合致している」が 46.0%、「どちらともいえない」が 23.9%、「あまり合致していない」が 7.4%、「まったく合致していない」が 0%であり、現状が当初の期待に概ね沿ったものとして捉えられていた。

設置形態別に見ると、全体と同様に当初の期待に概ね沿ったものとして捉えられているものの、表 1 の通り、国立と私立で「とても合致している」の割合が比較的高く、公立で「あまり合致していない」の割合が比較的高かった。

表 1：設置形態別に見た当初の期待との合致度

	国立（27校）	公立（23校）	私立（126校）
とても合致している	29.6%	8.7%	23.8%
やや合致している	48.1%	43.5%	46.0%
どちらともいえない	18.5%	34.8%	23.0%
あまり合致していない	3.7%	13.0%	7.1%
合致していない	0%	0%	0%

大学規模別に見ると、全体と同様に当初の期待に概ね沿ったものとして捉えられているものの、表 2 の通り、大規模と中規模で「とても合致している」の割合が比較的高く、小規模で「あまり合致していない」の割合が比較的高かった。

表 2：大規模別に見た当初の期待との合致度

	大規模（19校）	中規模（37校）	小規模（120校）
とても合致している	31.6%	32.4%	18.3%
やや合致している	47.4%	43.2%	46.7%
どちらともいえない	21.1%	21.6%	25.0%
あまり合致していない	0.0%	2.7%	10.0%
合致していない	0%	0%	0%

（３）IR 担当者はどのように配置されているか

「IR 担当者の人員配置にあたり、IR 活動を遂行するために必要となる能力のバランスに目配りをしている方はいますか」との設問に対して、設置形態別に見た場合、公立大学で「いない」の割合が比較的高かった（表 3）。3.2.で公立大学において大学執行部の期待との合致度が比較的低かったことと関係している可能性がある。

表 3：設置形態別に見た能力バランスの配慮

	全体	国立	公立	私立
いる	67.8%	70.8%	53.3%	69.7%
いない	32.2%	29.2%	46.7%	30.3%

大学規模別に見た場合、小規模で「いる」の割合が比較的高かった（表 4）。限られた人的資源の中でも、人間関係の距離の近さによって、お互いの能力や特性を理解しやすいという小規模大学の利点を活かして、適材適所の人員配置を行っていることが考えられる。ただし、3.2.で見た通り、小規模大学は大学執行部の期待との合致度が比較的低く、小規模大学においては能力バランスを考慮した人員配置とは別の要因が大学執行部の期待との合致度に影響している可能性がある。

表 4：大学規模別に見た能力バランスの配慮

	全体	大規模	中規模	小規模
いる	67.8%	60.0%	65.5%	70.4%
いない	32.2%	40.0%	34.5%	29.6%

本研究は、学術的には、IR 活動の質的向上と効果的な人員配置についての理解を深める新たな視点を提供した。大学経営におけるデータに基づく意思決定を支えるための重要な知見を提供することで、教育研究の改善に寄与した。社会的には、本研究の結果は、それぞれの大学が自大学の状況に応じた最適な IR 活動を展開し、着実に実施していくための手がかりを提供するものである。本研究により、これまで以上に効果的な大学運営が可能となり、大学教育の質向上につながることが期待される。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 橋本 智也、白石 哲也	４．巻 19
２．論文標題 IR組織・担当者の能力と大学執行部の期待の関係 ： ヒアリング調査に基づく類型化	５．発行年 2022年
３．雑誌名 大阪市立大学大学教育	６．最初と最後の頁 1～15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24544/ocu.20220318-017	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 橋本智也・白石哲也
２．発表標題 IR担当者の専門性と執行部の期待：訪問調査に基づく類型化
３．学会等名 大学教育学会第42回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 Hashimoto, T., & Shiroishi, T.
２．発表標題 Bridging executives' expectations and institutional researchers' expertise
３．学会等名 2020 AIR Forum（採択されたが大会は中止となった）（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 白石哲也・橋本智也
２．発表標題 IRは大学の期待に応えられているのか：小規模大学におけるヒアリング調査を通じて
３．学会等名 第26回大学教育研究フォーラム
４．発表年 2020年

１．発表者名 橋本智也・白石哲也
２．発表標題 IR担当者の専門性と執行部の期待：公立大学の聞き取り調査を中心に
３．学会等名 日本教育情報学会第36回年会（現地開催は中止、年会論文集を発行）
４．発表年 2020年

１．発表者名 橋本智也・白石哲也
２．発表標題 学生の多様化に対するIRの役割：米国の取組に関する文献調査からの示唆
３．学会等名 日本教育情報学会第38回年会
４．発表年 2022年

１．発表者名 Hashimoto, T., & Shiroishi, T.
２．発表標題 Bridging executives' expectations for first-year education and institutional researchers' expertise
３．学会等名 42nd Annual Conference on The First-Year Experience（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 橋本智也・白石哲也
２．発表標題 IR組織・担当者の能力と大学執行部の期待の関係：全国アンケート調査に基づく検証
３．学会等名 第29回大学教育研究フォーラム
４．発表年 2023年

１．発表者名 橋本智也・白石哲也
２．発表標題 IR担当者の専門性と執行部の期待の関係
３．学会等名 大学教育学会第45回大会
４．発表年 2023年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

Institutional Research（ＩＲ）文献メモ https://institutional-research.jp/

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	白石　哲也 (Shiroishi Tetsuya) (60825321)	山形大学・学士課程基盤教育機構・准教授 (11501)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関